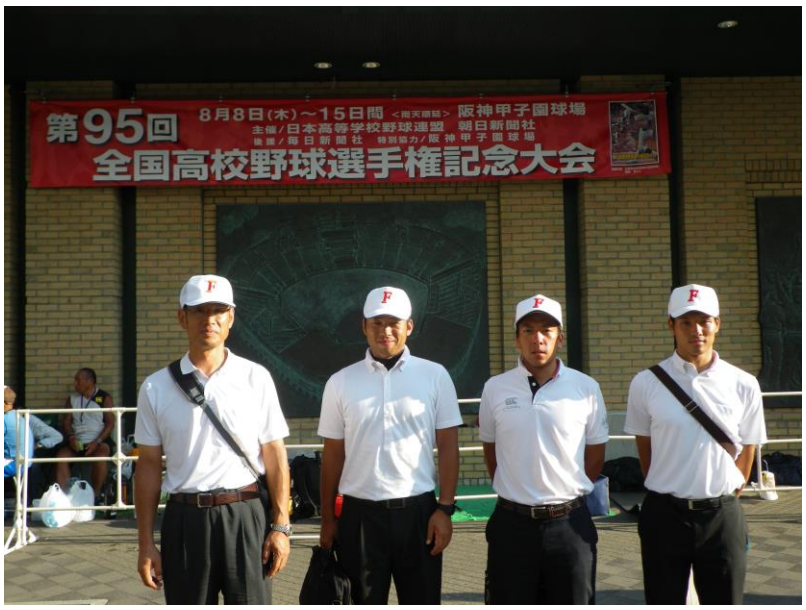
平成２５年度 甲子園指導者研修 報告



１．　期　間

平成２５年８月１１日（日）～１３日（火）　　―２泊３日―

２．　場　所

阪神甲子園球場（兵庫県西宮市）

津門中央公園野球場（兵庫県西宮市津門住江町）

３．　宿　舎

アパヴィラホテル（大阪市中央区農人橋１丁目）

４．　内　容

１１日	試合視察	聖　愛	―	玉野光南
		石見智翠館	―	西脇工業
１２日	練習視察	済　美		
	試合視察	佐世保実業	―	樟　南
		延岡学園	―	自由ケ丘
	球場施設・設備見学			
	理学療法士サポート			
１３日	試合視察	丸　亀	―	横　浜
		日大山形	―	日 大 三

５．　参加者

笠井　浩（北信支部 屋代）　　漆原 伸也（東信支部 軽井沢）

森　大樹（南信支部 茅野）　　井口 雄弥（中信支部 明科）

寺澤 誠一（責任者 塩尻志学館）

第 95 回記念大会の熱戦が繰り広げられる甲子園球場で行われた、第 16 回甲子園指導者研修に今年も４人の先生方とともに参加した。本研修の責任者を任されて９度目の甲子園は酷暑。熱中症対策が叫ばれる中、二泊三日の日程を無事終えることができたのも連盟関係者のおかげである。本研修でお世話になった皆様に深く感謝申し上げる。

津門運動公園野球場一塁側ベンチ

済美の上甲監督に話を聞く

今年も研修２日目に出場校の練習視察と球場施設・設備見学を行った。研修初日、大会本部から張り出された出場校の練習スケジュールを確認し、津門中央公園野球場で 10 時から２時間の予定で行われる選抜準優勝の済美高校を視察することにした。今回も事前の連絡なしで直接球場に出向き、その場でお願いして見学した。急な申し出にもかかわらず快諾し、スタンドに居た我々に一塁側ベンチから見学するよう声を掛け、自らベンチを拭いて招いてくださった上甲正典監督に心より感謝申し上げる。また、済美で大切にしている６つの決め事、指導者としてのあり方の基本を話していただいたことは、参加者はもとより本県連盟にとってもこの上なく意義深いことであったと思われる。

阪神甲子園球場三塁側室内練習場

第３試合終了後、井本亘高野連事業課長の案内で理学療法士サポート、三塁側室内練習場及び三塁側ベンチを見学した。例年施設の説明を受ける中で語られる水分補給を始めとする選手の健康管理に対する考え方には敬服するばかりであるが、昨年説明を受けた高校野球開催期間中だけグランド内に設置されるブルペンが今年度から常設に変わったと聞き、各関係機関の高校野球への配慮の大きさに驚いた。

研修３日目の甲子園球場は、横浜、日大三、花巻東、明徳義塾の試合があるからか長蛇の列。猛暑をものともせず甲子園に詰めかける観客の多さに毎年のことながら高校野球の人気の高さを実感させられた。

最後に、甲子園研修に参加された方々を始めとする本県連盟指導者の活躍ならびに本県球児の更なる健闘を祈念し研修報告としたい。

平成２５年度甲子園指導者研修レポート

屋代高等学校　笠井　浩

この度は、甲子園指導者研修の機会を与えていただきまして、誠にありがとうございました。この３日間大変多くのことを学ぶことができました。この研修の成果をこれからの高校野球の指導に活かして行きたいと考えております。

甲子園球場に到着してまず感じたことは、すべてにおいて熱いということでした。気温から始まって、選手、指導者、応援者すべてが熱く感じられました。各県の代表チームとして出場しているチームは、攻撃、守備、そのほかの動きもきびきびとしていてとても気持ちがよかったです。

研修初日の１１日は、第３試合、第４試合を観戦しましたが、聖愛高校の選手の太ももの太さに驚かされました。どんなトレーニングをしているのでしょうか。またその選手たちの打つ打球の早さには目を見張るものがありました。とはいっても大事な場面では、きっちり送りバントを使ってきました。ノーアウトランナー１塁で４番バッターでも送ってスコアリングポジションに送るか打たせるかは、チームの事情によって、試合の状況によって違ってくると思います。甲子園では、クリンナップには、打たせているケースも多々見られましたが、ダブルプレーを取られてしまうことも何度かありました。私は、基本的にはスコアリングポジションへランナーを送ってから打たせるようにしています。

試合を見て感じたことをいくつか書きますが、ピッチャーはテンポがよく、低めを中心としたピッチングをしていました。審判が高目をストライクに取らないので、ピッチャーも低めに投げているのでしょうが、そこにきっちりとコントロールできるところが、甲子園に出場しているピッチャーだと改めて思いました。攻撃では、スコアリングポジションにランナーがいるときには、右打者であればセンターから右方向、左打者であればセンターから左方向へ意識して打っているチームは得点がよく入っていたように感じました。私も選手たちには常日ごろから、スコアリングポジションにランナーがいるときには、特に意識してセンター中心にして打ち返して行くように指導しています。今後も続けていくつもりです。

２日目は、済美高校の練習会場へ練習を見学に行きました。まだ、前の練習校の丸亀高校がやっていたのでそれも見させていただいたのですが、バッティングのパワーは、それほどすごさは感じられませんでした。途中、丸亀の監督さんが近くに来て「今日はどうしたんですか」と言われたので、練習を見させてもらいにきました。と言うと、「うちの練習なんか見ても何の参考にもならんよ。」といった後、「そうか次の済美さんを見にきはったんや。」と言われました。丸亀高校といえば香川県の進学校なので、屋代高校の参考になることを見たかったのですが、練習は終盤で、すぐグラウンド整備になってしまいました。

済美高校の練習をスタンドから見学していると、上甲監督が「そこじゃ暑いでしょう。１塁側のベンチで見てください。」と言って案内してくださいました。上甲監督は練習中、グラウンドの中をそこら中歩き回って練習を見ながらアドバイスをしていました。途中１塁側ベンチへ来て、いろいろな話をしてくださいました。
一部紹介しますと、選手がやってはいけない６カ条、
１．投手は四球を出さない。
２．見逃し三振をしない。
３．自己の体調管理をしっかり行う。
４．常に全力疾走をする。
５．サインミスを絶対にしない。
６．指示の声をみんなで出し合う。
どれも当たり前のことばかりです。他にも選手に言っていることはあるそうですが、この６カ条をしっかりとやっていれば、野球になるし、強くなっていくと上甲監督がおっしゃっていました。あとグラウンドの中で再三言っていたことですが、「もっといい声を出せ。」「声にお金はいりません。」どんな声を出せと言っているのかと言うと、返事、アウトカウント、指示の声、タッチのときのアウトの声等出せる声はすべて大きな声を出せと言っていました。コーチも上甲監督に声の件でかなり強く注意をされていました。そのくらい声を出すことを選手に徹底させていることがよくわかりました。

次に、練習内容のことに触れますが、バッティング練習はピッチャーが１分間に６球投げるようにしているそうです。なぜかと言いますと、限られた練習時間の中でいかに多くの球を打つには、投げるボールを時間内に多くする必要があるからだそうです。１分間に１球違うだけで、１日１時間バッティング練習をしたとすると、１日60 球、1ヶ月に 1800 球違ってしまう計算だと言っていました。練習量を増やすには、時間を増やすことも大事だが、練習内容を工夫することはもっと大事だと言っていました。それができるようになるには、集中力と体力の両方がないと難しいと言っていました。フリーバッティングは約１２ｍから左ピッチャーがほぼ全力で投げていましたが、それをいとも簡単にランナー性の当たりを連発していました。とにかく始動までの準備が早いのでどんな球がきても振り遅れることがほとんどありませんでした。トップの位置を作ったまま構えている選手もたくさんいました。これらを自校の選手にも教えていきたいと思います。フリー後のシートバッティングで安楽君が投げましたが、ストレート、変化球とも切れがあり、済美の選手でもほとんど打ち返すことができませんでした。あの選手が２年生なのですから、世の中は広い。今大会屈指の右腕の活躍が楽しみです。そのあと、左投手が１２ｍの位置から投げてシートバッティングを行いました。さすがに防球ネットを前に置いて投げていましたが、いい当たり

を連発していました。体は決して大きくありませんが、どっしりと下半身がしっかりとしていて、下半身主導のバットスイングをしていました。

次に守備練習ですが、ノックの前に野手全員が各ベースに均等に配置し、ひたすらボール回しをしていました。ホームにいる人が基本で、１塁回り２周、３塁回り２周、２塁へ２回、一人が計６回投げてその人は終了となります。終わった人は、１塁ベースへ移動し、すべてのベースをまわりホームまで戻ってきたら終了となります。ボール回しだけで２０分はやっていました。上甲監督が、ボールを投げるのにも体力がいると言っていた意味がよくわかりました。ボール回しの後は、すぐにゲーム形式のノック、実際の場面をいろいろと設定してノックをしていました。必ずその際行っていたことは、アウトカウントの確認、どこにランナーがいるのかの確認、守備体系の確認、当たり前のことですが、常に確認をして守備練習を行っていました。わかっていても確認は大切なことです。常日頃の練習から声だし確認を徹底させていきたいと思います。

ゲームノックが終了して、道具の片付けとグラウンド整備が始まったのですが、グラウンド整備がとにかく早い。上甲監督に「腰を下げてもっと早くグラウンド整備をせんかい。」と気合を入れられてあっという間に内野グラウンドはきれいになってしまいました。整備をしている選手は、相当足腰にきているようでした。腰を下げてグラウンド整備をすることは、足腰の強化を狙っていると感じられました。

練習が終わって、上甲監督が私どもの見ていた１塁側ベンチへボールをもってきました。どうするのかと思いきや、見学していた私たち全員に済美高校名が入ったボールをひとつずつくださいました。とてもいい記念になりました。

本日の試合は３試合行われましたが、とにかく今大会は左投手が多い。本日３試合のうち、左が先発したチームは４つありました。それぞれの投手に特徴がありますが、球の速さで勝負しているピッチャーは少なく、コントロールと球の切れ、タイミングをはずす変化球をうまく使っていたように思います。うちの高校にも左ピッチャーがいるので、今回見たことをよく話して甲子園のピッチャーに近づけるようにしたいと思います。本日の試合は３試合とも投手戦で、２試合が１対０、もう１試合が４対２の試合でした。どの試合もバントをうまく決めたほうに勝利の女神が微笑んでいたように思います。

試合後、日本高野連事務局の井本さんに甲子園球場内を案内していただきました。まず３塁側の室内練習場を見せていただきました。ここは大会期間中、次試合のチームがアップをしたり待機をする場所になっているそうです。球場を改修してから選手が観客のいるところを通らなくてもここにこれるようになったので、管理がしやすくなったそうです。この後、３塁側のダッグアウトからグラウンドへも出させていただきました。試合後のグラウンド整備を行っていましたので内野へは入ることができま

せんでしたが、グラウンドの土も触ることができました。選手たちをここでやらせてやりたいという気持ちが改めて高まりました。ダッグアウトですが、選手が座るとグラウンドが目線の高さになってしまいびっくりしました。監督もサインを出すときは、立って高い場所にいないと選手がサインを見づらいなということもわかりました。グラウンドへ入れたのはとても貴重な体験となりました。

３日目は２試合観戦しました。１試合目の横浜対丸亀も両校とも左投手、パワーの横浜に対し、隙のない丸亀という印象でした。両投手ともタメがあり、変化球を交えてタイミングをはずして打ち取るタイプでした。両投手とも球速は１２０ｋｍ台だが、タメがあるのでたまに切れがあり、球速以上に球が速く感じられました。私が目指している高校野球のピッチャーの理想の投手２人でした。このような投手を育てたいものです。進学校の丸亀高校でもいい投手がいれば強いチームも破ることができることは実証済みです。公立校で私立校に打ち勝つことはなかなか難しいと思いますが、相手に得点を与えないようにして私立の強豪校に勝てるようにしていくのが私の夢です。試合結果は７対１で横浜高校が勝ちましたが、丸亀高校も決して引けを取ってはいませんでした。

今大会は丸亀高校のような進学校が、他にも日川高校、彦根東高校が出場していました。私の勤務している屋代高校も進学校ですが、限られた練習時間、練習環境の中ではありますが、創意工夫をして今後甲子園出場に向けて練習に励んでいきたいと思います。

今回のこの研修を通して、改めて甲子園へ出場するチームのレベルの高さを思い知らされました。しかし、同じ高校生がやること、工夫と努力で何とかなる部分も多々あると思います。今後も生徒たちの好きでやっている野球で、目標の甲子園に少しでも近づくことができるように、全力でサポートしていきたいと思います。

平成 25 年 8 月 31 日

甲子園研修報告

茅野高等学校　森　大樹

8 月 11 日から 3 日間甲子園に行かせていただきました。この 3 日間毎日 38℃を超える暑さのなか、どのチームも甲子園大会だけあって、大胆に振ったり投げたりすることができるだけでなく、非常に細かく繊細な野球を行っているなと甲子園という舞台を生で観て感じました。

今現在私のいる茅野高校の野球部はお世辞にも強いチームとは決して言えるものではありません。甲子園とくらべて選手の技能のレベルはもちろんのこと体格や考えの深さ、スタッフやハード面の充実、チームの人数までもまるで違うレベルです。まず純粋に思ったことは、同じ高校野球をやっている子どもなのにここまで環境が違うのかと少し哀しくなりました。しかし、どんなに弱い高校でも必ず実行することができるプレーがいくつかありましたので、取り上げいきたいと思います。

１．準備方法

試合前にグランドに入ってから選手たちはどのような動きをしているかいまず着目して観ていました。キャッチボールのやり方にまず着目しました。もちろん通常のキャッチボールを行うチームもありましたが、正体した状態で向き合ったクイックスローであったり、チーム内で決まったキャッチボールドリルを行っているところもあったりと様々な準備の方法がありました。試合中一番エラーが起きやすい場所は打球処理や送球ミスよりも握り替えに時間がかかってミスに繋がるケースが非常に多いと思います。なので、日頃から握り替えからスローイングまでを意識した練習はとても大切であると思いました。

また、シートノックに関して、練習では声の繋ぎでの連携は周囲の声援やとても広い甲子園では全く通りません。何も聞こえない状態でどのようにして行っているのかを見ていました。中継のラインのそろえ方、間のフライなど声かけが必要となってくる部分がありますが、大きなジェスチャーであったり、近くの者の指示ができているからこそ大舞台でのプレーが成り立っているのだなと実感しました。なので、夏の大会ならば地方大会でもベンチの声や仲間の声が届かないことがあります。そのために、日頃から声かけの練習だけではなく、声の繋ぎをあえてしない練習も取り組む必要があるなと思いました。

２．試合中

それだけ指示が通りにくい環境でプレーをしている選手たちにとってサインプレーが攻撃面だけでなく守備面においても大事になってきます。試合を観ながら、甲子園の選手たちはどのようにしてポジショニングの移動をしているのかに注目して観ていました。何度かベンチから外野のポジショニングの移動指示は出ていましたが、あまりしっかり伝わ

っている様子ではありませんでした。なので、予め選手たちは打者に対してのデータを徹底的に分析をし、それに対しての対策練習をゲームノック等で行い試合に臨んでいるように感じました。更に、試合中の最新のデータと照らして少しずつポジションを変えているように見えました。そのために事前の監督からの指示とそれを受けて現場を仕切る捕手が非常に大事になって来ると思いました。

どんなに弱いチームでも対戦相手の特徴を知り、選手たちが理解することで良い当たりをうたれても、１つのヒットが１つのアウトとなる。その大切さを学びました。

３．その他

甲子園で試合を観ながら改めて監督業の難しさを知りました。選手の起用法、交代のタイミング、タイムの取り方、それらひとつとっても非常に難しい選択を試合中に迫られています。特に私が観ている試合で投手交代するタイミングは本当に難しいと思いました。厳しい地区予選を勝ち抜いてきた百戦錬磨の監督さんであっても交代のタイミングを間違えるだけで一気に試合の流れが変わってしまします。スタンドで観ているから色々と考える余裕と時間はありますが、いざ指揮を執るとなると緊張やプレッシャー、様々な確率を考えてしまい思い切ったことができなくなるなと思います。ですので、色々な監督さんの考えや試合を観て聞いていくことで自分自身の成長に繋がると思いました。

また、愛媛県済美高校の上甲監督のお話をしていただける機会を設けていただき本当に感動しました。野球のひとつひとつが非常に細かく、1 分 1 秒をも無駄にしない、洗練させた練習を行っていることを監督さんのお話を聞いて非常に感じました。

甲子園に何度も来られている監督さんのお話しを聞ける貴重な体験をさせていただき本当にありがとございました。

まとめ

今回の研修で改めて“甲子園”という場所の素晴らしさを肌で感じることができました。見学で 3 塁側ベンチに入らせていただいた時、今度は自チームのユニフォームを着てここに戻ってきたいと強く思いました。私はここにくるために選手共に成長し、一歩一歩夢の場所に近づけるよう日々精進していきたいと思います。

今回このような研修にあたりご尽力して下さった長野県高校野球連盟、ご行動をともにしてくださった先生方には心から感謝しております。ありがとうございました。

平成２５年９月１７日（火）
軽井沢高校野球部
漆原伸也

平成２５年度甲子園研修報告書

１．はじめに

私が高校球児だったのは今から１３年以上前である。小・中学校と続けてきた野球を野沢北高校に進学した後も続けた。今でも覚えている様々な記憶。授業が終わると、黒い学生服を着た野球部員は学校から離れたグラウンドへ、ものすごい勢いで自転車をこいで向かう。グラウンドに到着すると、グラウンド整備から始まり、大きな掛け声で走り、精一杯白球を追いかけ、体からこれ以上出ないのではないかと思うくらい汗を流し練習に明け暮れる。当時はそれが全てだった。そんな青春の最終目標は甲子園。何にも代えることができない野球の聖地である。残念ながら選手として甲子園出場の目標は叶わなかったが、幸いにも高校野球の指導者として、聖地甲子園で勝つことを目標に日々野球に励んでいる。

８月１１日から１３日までの３日間、憧れの地、甲子園で研修を行い、多くのことを学ぶことができた。自分自身この研修を含めて、二回目の甲子園であった。一回目は２００９年の春の選抜大会で、青年海外協力隊の任期を終え帰国してすぐに、協力隊の関係でチャンスがあり、今大会と同じく特別席で試合を観戦することができた。今でも覚えているのは言葉では表せない甲子園の雰囲気、そして感動である。甲子園球場に足を踏み入れ、そして、目の当たりにした光景は迫力満点で鳥肌が立ったものだ。今回の研修は、自分自身にとって初めて生で観る夏の選手権大会ということで、前回以上に大きな期待を持って参加することができた。そして三日間、期待通り、多くのことに感動し、学ぶことができた。

２．目的

甲子園研修に参加するに当たって、自分自身で大きく分けて二つの目的を設定した。

一つ目が、甲子園出場チームがどのような戦術で甲子園を戦っていくかを学ぶということである。自分のチームとの違いはどんなところにあるかということを学び、今後の参考にしていこうと思ったからである。

二つ目が、出場校の練習を見学して、甲子園に出場するチームの練習がどういうものなのか、そしてそこから自分が指導しているチームに活かせるもの、真似できるものを見つけるということである。

３．試合観戦

全部で５試合じっくりと観戦することができたが、どの試合でも共通していたことについて挙げていきたい。

一つ目は外野手のポジションについてである。外野手の守る位置がプロ野球並みに深く、間を抜く打球でないと長打が出ないということである。あまりにも深く守っているので最初は非常に驚いたが、どの試合を観ても外野者が守る位置はかなり深いのである。また、レフトは左打者でもあってもラインの方に寄って守るということが無かった。甲子園の試合自体が左打者のレフト線のヒットというものがあまり無かったので、納得がいった。

二つ目は、継投のタイミングの重要性である。先発投手を引っ張りすぎて負けてしまったチームがいくつかあったし、逆に、継投のタイミングを早めに行ったチームは接戦を制し、勝ち上がっていった。自由ヶ丘対延岡学園の試合がそれを象徴している試合であった。一回戦自由ヶ丘高校対延岡学園の試合の差は完全に継投のタイミングにあったと思う。信頼できる投手が複数人いるかということも重要であるし、そしてどこで投手を代えるかという監督の決断も重要であると感じた。

三つ目は、セーフティースクイズをするチームが増えたことである。セーフティースクイズをどう防いでいくかということも今後考えていかなければいけないと感じた。

四つ目は、甲子園の大歓声の中、指示の声は通っているのか疑問に思ったが、一瞬の判断力の良さを見ると、相当守備を鍛えているという印象を持ったし、連係に関して、どのチームも洗練されているように見えた。個人個人の守備力の良さだけでなく、カバーを徹底して行っているところに隙の無い守備というのが見て取ることができた。

五つ目は打撃、投手に関して。どのチームもストレートにはめっぽう強く、１４０km/h を超える速球に対しても、振り負けることなく打ち返していた印象だ。ただ、スライダーやカーブ系のボールに凡打する選手が多く、甲子園で勝っていく投手の条件として、速球だけでなく、スライダー、カーブといった変化球が絶対に必要になるということを感じた。また落ちるフォーク系のボールも多くの投手が投げていたように感じた。

４．出場校練習見学

研修二日目は、済美高校の練習をメインに見学することができた。練習メニューは三か所バッティング、シートバッティング、ボール回し、シートノックであった。その中で、印象に残った物を挙げていこうと思う。また、上甲監督から直接お話も聞けたのでそれについても触れていきたいと思う。

一つ目は声についてである。済美高校はアップの段階から、非常に気合いが入っていて、列をきちんと整え、大きな声を出してアップを行っていた。アップの時から、上甲監督は「声を出すのに銭はかからんやろ、出さんかい！！」と気合を入れていた。どの

練習をする時も、必ず声を出させていたし、上甲監督は何よりも声に関しての注意をしていた。それだけ声を出すということが大事だということだと思うし、必ず必要なことであるということがわかった。そして何よりも選手達が声を出し慣れているように感じた。あれだけの声は普段からやっていなければ出ないと思うし、相当鍛えられているように思う。

二つ目は三か所シートバッティングについてである。まず左右に左腕投手がかなり前（おそらく１２メートル位）から速い球を投げ込んでいた。真中にはマシーンをセッティングしていた。バッティングピッチャーの横にはボール渡しがついて、投げるとすぐにボールを渡し、かなり速いペースでバッティングを行っていた。後で上甲監督から聞いた話によると、済美高校は１分間で６球打撃投手に投げさせているそうだ。限られた時間で沢山打たせるために、それくらい速いペースを設定して行っているそうだ。それが毎日続けば、一年で大きな差になるとも上甲監督はおっしゃっていた。またバッティング投手がボールを投げてしまっても、それに対して打者に「どうせ試合ではボール球に手が出てしまうんだから、ボールも振れ！そして打て！！」とおっしゃっていたのも印象に残った。

三つ目に印象に残ったのは各ベースに４人くらいずつついてのボール回しである。やり方はボール回しを何種類かすると、終わった者から順に次の塁に移動して、ボール回しを同じようにやっていくというやり方で、全員が休む間もないし、ベース一周するまで終わらないというかなりハードなものであったが、済美の選手達の凄いところは、ボールを逸らしてしまうことが殆どなく、ボール回しが途切れないことである。ボール回しという基本を確実に行える所に、済美高校が心技体のどの面でも、どれだけ選手を鍛えているかということが見て取れた。

最後に上甲監督が話してくださった内容について触れていこうと思う。上甲監督が選手達に話している、やれば負けてしまう六項目というものがあるというお話をしてくださった。一つが見逃し三振、二つ目が四球、三つ目がサインミス、四つ目が指示の声を出さない、五つ目が全力疾走をしない、最後が体調管理ができない、これら六つを項目として教え、無くすように鍛えているそうである。一見当たり前のように聞こえるが、しかし、どれだけ徹底してそれを無くそうとしているか、そして私が指導している選手達にその自覚があるかと聞かれると、そうではないと感じた。この六項目については選手達にも話をし、伝えていきたいと思った。

また上甲監督はすごいオーラを持っていらっしゃるが、我々に対し丁寧に対応してくださったことに感動した。心から感謝したいと思う。

４．おわりに

この三日間の研修を通して、指導者として今後活かしていけることを沢山学ぶことができたと思う。指導者として今後役立てていけそうな情報や知識を得ることができたこ

とを非常に嬉しく思うし、必ず活かしたいと思う。そしてそれ以上に、絶対に甲子園で勝ちたいという思いを強くすることができたことが一番の収穫だったと思う。

こうして無事三日間の研修を終え、沢山のものを得ることができたのは、寺澤先生をはじめ、面倒を見てくださった高野連の皆さん、そして一緒に研修に参加した三人の先生方のお陰であると思う。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

平成２５年度甲子園指導者研修報告書

明科高等学校　井口雄弥

今回、甲子園指導者研修に参加させて頂き、本当にありがとうございました。お忙しい中、我々の研修に同行して下さった寺澤先生、また快く研修へ送ってくださった長野県高等学校野球連盟、中信地区の先生方、学校関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

この三日間で私の狭かった野球観が広がり、目指すべき監督像・チーム像というものが少し見えてきた気がします。実際に甲子園球場のベンチに入れてもらいグランドレベルの感覚を味あわせて頂いた際には、言葉にできない衝撃とまだ何も成し遂げていない私が踏み込んではいけない圧倒的な重みすら感じました。甲子園には、ここでしか味わうことの出来ない野球があり、ここでプレーした者にしかわからない野球があるのではないかと思います。そして人生をも変えてしまうパワーを甲子園のグランドから感じました。私自身、高校野球に携わりこの場所を目指し、現役時代に叶えることが出来なかった夢を叶えたいと思い教員という道を選びました。しかし甲子園という場所は現在の私の指導力では遥か遠く、このままでは憧れで終わってしまうと痛感させられました。今回の研修で多くの指導者、チームを視察させていただきました。どのチームにも甲子園まで勝ち進める理由と根拠があり、揺ぎない自信が見てとれました。全ての部分で未熟な私なりに、この研修で感じたこと・学んだことを報告させていただきます。

一日目

青森県代表弘前聖愛　対　岡山県代表玉野光南

両先発投手共に 140ｋｍ近いストレートを投げ込み、私の中では投手戦になるのではと予想していました。そんな中、同じ球速でありながら弘前聖愛の先発投手小野君のサイドスローから繰り出されるシュート回転の球になかなか対応しづらそうな玉野光南の各打者の姿がありました。加えてキレのあるスライダー、タイミングを外すカーブ、そしてチェン

ジアップ系の緩急を使い、とにかくテンポよく打ち取っていました。
そして弘前聖愛の打者は 140 キロ近いストレートに対して力強く踏み込みセンター中心に打ち返していました。ホームランを含め、チャンスでの集中力を発揮し、相手を終盤にかけて追い込んでいく試合運びも印象的でした。また弘前聖愛の各選手は攻撃のサイン交換の際にアウトカウントを監督さんに指で毎球確認していました。こういったところにも当たり前のことを徹底できるチームの強さを感じました。

島根県代表石見智翠館　対　兵庫県代表西脇工業
　石見智翠館は試合開始から 4 球で先制点を取りました。相手投手のボークもありましたが、その積極的な攻撃や各打者のスイングには自信を感じました。しかし西脇工業のバッテリーも慌てることなく、イニングの途中ではありましたが変化球多めの配球に変えるなど、相手を感じ取る感覚や対応力は見事でした。またこの試合は地元高校の試合であったため、球場全体が異様な雰囲気でありました。一球・ワンプレーに対する声援はとてつもないものでした。しかし、そのような雰囲気のなかでも両校の選手たちは自らのプレーに集中し、淡々と平常心で野球をしているように映りました。
西脇工業の左打者の左投手を苦にしないバッティングも印象的でした。フィニッシュまで顔を残し、逆方向への意識が見て取れました。食らいついていく、何とか塁に出る、ランナーを進めるといった役割を各打者が自覚し、それを実行していく個々の力とそれを繋ぎ合わせていくチーム力も素晴らしかったです。

二日目

愛媛県代表済美高校　練習見学
　済美高校の練習は殺気すら感じる雰囲気の中で行われていました。球場に入るまでの選手の姿からも野球に対する本気の決意、姿勢を強く感じました。それでいて選手のプレーや行動には、やらされている感は全くなく本当に野球を楽しんでいるという感覚を持ちました。また、指導者の立場であるコーチの方も選手と同じように、いやそれ以上に声を出し先頭に立ってチームを盛り上げている姿や我々に対する深いお辞儀、大きな声での挨拶には感動を覚えました。指導者である前に生徒の見本であるという一人の大人としての自覚、また上からの視線ではなく自らもチームの一員であるという気持ちがあるからこそできることなのではと思いました。上甲監督とお話させて頂く時間がありましたが、丁寧にかつ熱心に話をしてくださいました。結果を残しているから説得力があるというだけでなく、我々の心に響く人間性と野球に対する底知れぬ探究心がひしひしと伝わってきました。選手と試合中に守るべき 6 カ条を決めているというお話をしてくださいました。それはできそうでできない、当たり前のことだが徹底するのが難しいものでした。基本的なこと、

普通のことが普通に出来るからこそ甲子園で平常心を失わず勝ち進むことが出来るのだと教えていただきました。また練習中に上甲監督が一声かけた選手のプレーが良い方向へ変わるという場面をいくつも目の当たりにしました。声の大きさやトーン、タイミングなど一人一人にベストな場面で声をかけていました。選手の長所を最大に伸ばし自信を持って試合に臨める準備をしているのだと感じました。
「野球は勉強と同じである」という言葉には、日々の反復練習を大切にしていくこと・基本的なことが一番大切であるということ、また野球を通して自らにチャレンジし成長していくという済美高校の強さが伝わってくるものでした。

三日目

香川県代表丸亀　対　神奈川県代表横浜
　両左腕の先発始まった試合でありました。横浜の先発伊藤君は左打者に対して球速ではなく外のストライクを遠くに見せるために様々な工夫をして打ち取っているように感じました。ホームベースがとても広く見え丸亀の各打者が狙いを絞れずにいる印象を受けました。マウンドさばきが素晴らしく絶妙な間や球持ちは、さすが横浜のエースと呼ばれる投手でした。横浜の各打者は左投手に対する対応が出来ていたように思えました。序盤は丸亀バッテリーの配球パターンを研究してきており、外中心の球を踏み込み狙い打っていました。終盤にかけて丸亀バッテリーが内角の球を使いはじめ苦しむ場面が見られたが、甘く入ってくる変化球に対しては逃すことなくはじき返し得点を重ね、試合の主導権を握り続けていました。

最後になりましたが、今回このような貴重な研修に参加させていただき本当にありがとうございました。生徒も私も多くの方々に支えられ、応援していただきながらグランドに立つことができているのだと改めて感じました。甲子園というグランドにふさわしいチームを作り上げたい、もう一度あのベンチに入り生徒とともにプレーしたいと強く思いました。そのためにも生徒に変化を求めるばかりではなく、私自身が変わり成長していかなければならないと学びました。今回の経験を今後必ず生かし、長野県高校野球のさらなる発展に少しでも貢献できるよう日々生徒と共に努力していきたいと考えています。